

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

1851-1880 (9)

塩野和夫

第3章 宣教師の思想と行動

3 ハムリンの思想と行動

はじめに

アメリカンボード本部は19世紀中期に入ると明確に宣教方針を規定し、各地域で活動する宣教師にも順守を求めてきた。すなわち、地域教会の自治 (Self-Governing)・自給 (Self-Supporting)・宣教主体 (Self-Propagating) の重視である。本部の宣教方針にさまざまに対応する中で、際立った行動をとる宣教師もいた。その一人がハムリン (Hamlin, Cyrus 1811-1900) である。

1837年にアメリカンボードの宣教師に任命されると、1838年12月にハムリンは妻のヘンリエッタ (Hamlin, Henrietta) と共にトルコのコンスタンティノーブルに向かった。コンスタンティノーブルではベベク神学校 (Bebek Seminary) で1840年から60年まで教えている。ところが、1860年にボードの宣教師を辞任し、ロバート大学 (Robert College) 設立に奔走し、1863年から73年まで学長を務めている。ハムリンはなぜ宣教師を辞任し、ロバート大学の設立に情熱を傾けたのか。

宣教師の辞任をめぐる現場においても本部の宣教方針をめぐる議論があったとされている。要するにベベク神学校で教えてきたハムリンの教育に対

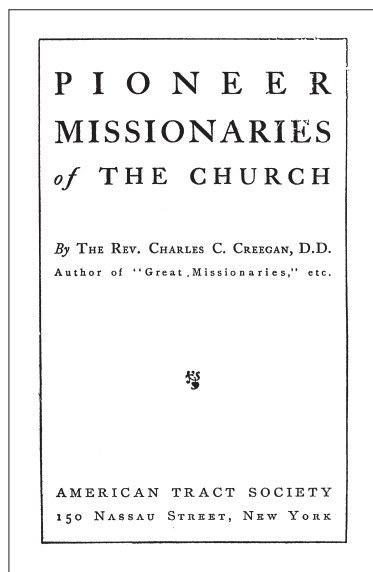
する立場はボード本部の宣教方針とは一致できなかった。そこで、ハムリンは自らの信念に従ってロバート大学の設立へと向かった。

ベベク神学校の辞任からロバート大学設立への向かう時期を中心としてハムリンの思想と行動を探っていきたい。

(1) 独立心に富む青年

サイラスは1811年1月5日にメイン州のウォーターフォード (Waterford) にハンニバル (Hamlin, Hannibal) とスザーナ (Hamlin, Susanna Faulkner) の息子として誕生した¹⁾。ハムリン家は地域社会から尊敬を受けていた農家で、家族全員が作業に従事していた。編み物を織り、糸をつむぐ音を聞いて幼少期からサイラスは育つ。少年になると、種まき・干し草づくり・刈り入れと大人と一緒にあって、農作業に取り組んだ。このような生活が独立心と創意工夫に富む行動力をサイラスに育てた。

16歳の誕生日を迎えた直後にハムリンは銀細工の職人になるために自宅を離れて40マイル離れたポートランド (Portland) に行った。仕事に従事しながら、毎日夜間学校に通う。この時期に初めてキリスト教宣教への関心を持つ。そこ



Rev. Charles C. Creegan, D. D., *Pioneer Missionaries of the Church*.

1) ハムリンの幼少期から青年期については次の2冊に記述がある。

Cyrus Hamlin, *My Life and Times*, 1893

'Cyrus Hamlin, D.D., LL.D.', Rev. Charles C. Creegan, D. D., *Pioneer Missionaries of the Churches*, 1903, pp.113-126

で、2年後には大学進学を目的としてブリッグトン・アカデミー (Bridgton Academy) に入学した。

ボードイン大学 (Bowdoin College) に入学したのは1830年である。大学では優れた成績を残したが、それはキリストのためであり、彼の動機は明確だった。34年にバンゴ―神学校 (Bangor Theological Seminary) に入学し、教授の指導に刺激を受けて研究に励んだ。37年に卒業している。

(2) ベベク・セミナリーにおけるハムリン

ハムリンは1837年にアメリカンボードの宣教師に任命されると、38年9月にヘンリエッタ (Jackson, Henrietta) と結婚した。2人はその年の12月に出航し、スミルナ (Smyrna) に着いた。さらに2週間かかって到着したコンスタンティノーブルで、ハムリンは宣教師として働き、教え、充実した活動を始める。ところが間もなくキリスト教に対する迫害が起こり²⁾、ボードの宣教師グッデル (Goodell)・シャフラー (Schaufler)・ドワイト (Dwight)・ハムリンはトルコから退去させられた。

ハムリンは1840年11月にボスポラス海峡に臨みコンスタンティノーブルから7マイルの距離があるベベク (Bebek) に取得した家でベベク・セミナリー (Bebek Seminary) を始めた³⁾。男子の寄宿学校でアメリカの師範学校 (normal school) に準じた課程に加えて、バイブルクラスやチャペルを設けた。当初の生徒はわずかに2名だったが、しばらくして増えていき40年代半ばには40名から50名になっていた。学外からの訪問者も1年間に1000名を数え、地域社会の

2) 迫害の様子は次に記されている。

Rev. Chales Creegan D. D., *Ibid.*, p.117

'Persecution Begins, 1839.' W. E. Strong, *The Story of the American Board*, pp.93-94

3) ベベク・セミナリーについては次の2冊を参考にした。

'Cyrus Hamlin, D. D., LL. D.' Rev. Chares C. Creegan, D. D., *Ibid.*, pp.113-126

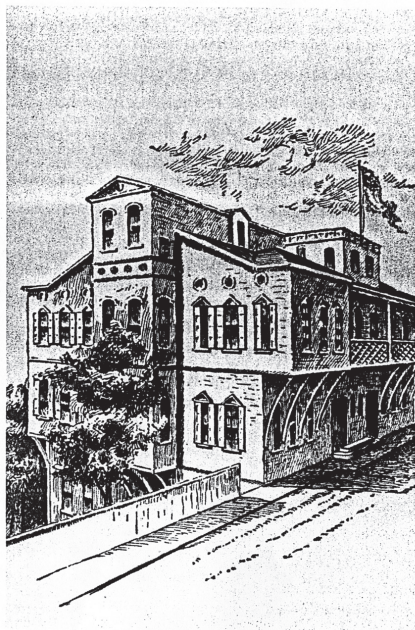
'Bebek Seminary,' Marcia and Malcolm Stevens, *Against the Devil's Current: The Life and Times of Cyrus Hamlin*, 1988, pp.126-159



グッデル と
(Goodell, W. 1792-1867)

シャフラー
(Schauffler, W. G. 1798-1883)

関心も強くなっていた。生徒にはユダヤ人やギリシャ人もいたが、ほとんどはアルメニア人だった。年齢も14歳から20歳と様々で、年齢差や知的レベルの違いは講義に困難を伴った。それでも、化学の実験や物理学の講義は大きな反響を生んだ。1841年にはギリシャの王室による建物へと学校を移転している。生徒のすべては貧しく、季節に応じた服を着ることのできない者も多くいた。そこでハムリンはカリキュラムの中に技能を身につけ、働く時間を取り入れた。実業教育である。彼は生徒たちと共にストーブや煙突、十能や灰受け皿を作って販売し、収益で生徒た



移転したベク・セミナリー

ちの服を買った。1844年の冬に生徒たちはみな温かい服を身につけていた。アンダーソン (Anderson, Rufus 1796-1880) は指摘している。「サイラスは生徒たちには注意深い配慮を示している。しかし、彼は決して生徒に改宗を試みようとはしない」⁴⁾。

生徒たちとの共同作業による貧困問題の解決は、ハムリンに示唆を与えていた。その頃コンスタンティノーブルにはパン屋がなく、新鮮でおいしいパンを手に入れることができなかった。そこでハムリンはベーカリーを作ることにする。建物を建て、粉ひき機械を購入し、エンジンを注文し、パンを焼くオーブンを設置すると、パンを作り販売した。ベーカリーは人々の食生活改善に貢献した。クリミア戦争 (1853-56年) が勃発すると、多くの負傷兵が収容された病院 (Scutari Hospital) から毎日6千ポンドのパンがハムリンベーカリーに注文された。次いでハムリンが作った洗濯工場にも、毎日数千着の洗濯物が持ち込まれた。この時期にコレラが兵士と貧困層の人々の間で発生したが、ハムリンがすばやく薬を手配して配布したので広がることはなかった⁵⁾。

18年間に及ぶ活動の後に、ハムリンはヨーロッパ諸国を經由してアメリカへ帰国した。ヨーロッパの各地ではトルコにおける話を聞こうとしてどこにおいても多くの聴衆が集まった。彼らはトルコの教会のため、ハムリンの学校のために数千ドルの寄付をした。アメリカでも熱烈に歓迎され、彼らもまたトルコにおけるハムリンの活躍に熱狂した。旅の途中、イギリスで開かれたトルコ宣教協会 (Turkish Missions Aid Society) 主催の40日間にわたる集会で、ハムリンはトルコに関心を持つ多くの人々と出会った。その中に彼の生涯を大きく変えることとなる人物がいた。

4) Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, p.128

5) Rev. Charles Creegan D. D., *Ibid.*, pp.119-122

(3) 浅瀬に行く船にも似たセミナー

1840年に開校したベバク・セミナーは1858年までの18年間を順調に歩んでいたように見える。特に際立った実業教育はハムリンの才能を十二分に生かした上、授業料や服装にも事欠いていた生徒に収入の道を開き歓迎されていた。しかし、まさにこの実業教育を巡ってアメリカンボードのトルコミッションでは熱い議論が交わされていた⁶⁾。

トルコミッションに参加したばかりのレンネップ (Lennepe, Henry Van) は「このように世俗的な活動は生徒の学習の習慣と敬虔さをそらしてします」と強く反対した。ドワイト (Dwight, H. G. O. 1803-1862) はレンネップに賛同した。それに対してハムリンは「欠乏した社会に生れた魂は物乞いするよりも労働から学ぶことによって心を腐敗させることはない」と反論した。同労の宣教師からも理解されなかったハムリンの主張を受け入れたグッデル (Goodell, W. 1792-1867) はベバク・セミナーの存続に重要な役割を果たすことになる。グッデルとはどういう宣教思想の持主であり、なぜそれほど大きな影響力を持つことができたのか。彼の立場を端的にまとめた論述⁷⁾を見ておきたい。

狭義のキリスト教思想に変化がなかったのに対して、宗教や文化を含む、地域社会に対する見方や態度には顕著な変化があった。貧しい人々に対して、後期のグッデルは生活に必要なものを与えながら、福音を説いた。そこには、ただ福音を伝えるというだけではない、地域社会に溶け込み、その一員として生活しているグッデルの姿がある。イスラム社会に対する見方に、この変化はとりわけ顕著である。初期の報告に見られたイスラム社会に対する厳しい批判は、後期には見られない。後期のグッデルはむしろ、イスラム社会に

6) トルコミッション及びボード本部におけるベバク・セミナーをめぐる議論については主に次の文献を参考にした。‘Secular Activities,’ Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, pp.143-159

7) 塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 I 1810-1850』153-154頁

好意的な関心を持つ。また、イスラム教徒との良好な関係を育てながら、積極的にイスラム社会に入っている。イスラム社会に対する批判から共存への変化が、後期のグッデルに現れている。

グッデルはなぜハムリンの理解者であることができたのか。彼らの活動の場は明らかに異なっている。グッデルが教会を主な活動の場として地域の人たちへの福音宣教活動に従事したのに対してハムリンはベベク・セミナリーにおけるキリスト教教育に従事した。しかし、後期グッデルのイスラム社会に向けた立場に目を転じると両者の共通性が明らかになる。それは地域社会との共存関係を重視し育てていこうとする姿勢である。グッデルは地域社会との共存関係を育てながら、福音宣教の活動に取り組んでいた。同様にハムリンも地域社会や生徒との共存関係を大切にしながら、教育活動に打ち込んでいた。したがって、活動の場の違いを越えて、地域社会との共存関係を重んじる共通した立場からグッデルはハムリンの立場に深い理解を示したと考えられる。

トルコミッションにおけるベベク・セミナリーをめぐる論争はボストンのボード本部にも届いた。アンダーソンは「サイラスはトルコの置かれている状況の理解から離れているばかりでなく、本部が唱導している方針にも違反している」と判断した。このような本部の考えに危機を覚えた弟のハンニバル（Hannibal）はハムリンに対して本部に弁明するようにと懇願した。それに対してハムリンは「本部に対して返答する必要は何もない」と応えている。そこで、ボード本部は方針としてセミナリーの活動停止を決定した。本部からの通知に対してハムリンの理解者であったグッデルはトルコミッション会議の場で「セミナリーにおける世俗的活動の存続を維持するように」と強く主張し、会議もこれを認めた。アンダーソンは1843-44年にトルコを含めた中近東を訪問している。この時にもベベク・セミナリーは存続を認められている。

「セミナリーは岩場や浅瀬、サンゴ礁の間に行く船のようである。船長は舵を握る手を離すわけにはいかない」⁸⁾。ベベク・セミナリーが存続をめぐって議論されていた時期のハムリンの発言である。自らの発言にある通り、彼は18年

間セミナーの舵を取り続けた。しかし、それは順調に進んだ月日ではなく、むしろセミナーの存続さえ危うくなるような日々における旅路であった。

(4) ロバート大学開設とハムリン

1858年のアメリカへの一時帰国に際し、イギリスで開催されていたトルコ宣教協会でハムリンが決定的な出会いをした人物はロバート (Robert, Christopher, R. 1802-1878) である。ニューヨークに住むアメリカ人慈善家であるロバートはトルコにキリスト教系大学の設立を主張し、ハムリンと意気投合した。1860年にはロバートとの共同事業である大学設立に打ち込むためにハムリンはアメリカンボードを退会する。トルコミッションに関わって23年、ベベク・セミナーで教えて20年が経っていた。その後、1863年にロバート大学を設立し、ハムリンは設立時から1873年まで学長を務めている。しかし、その間の事情は単純ではない⁸⁾。

まず、開学までの経過を見ておきたい。ハムリンによると、すでに1859年に将来の大学建設用地の調査を始め、ベベク近くのコロウチェシナ (Koroucheshme) に適地を見つけ



ハムリン (Hamlin, Cyrus 1811-1900)

8) Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, p.149

9) 文献としては主に下記を参照した。

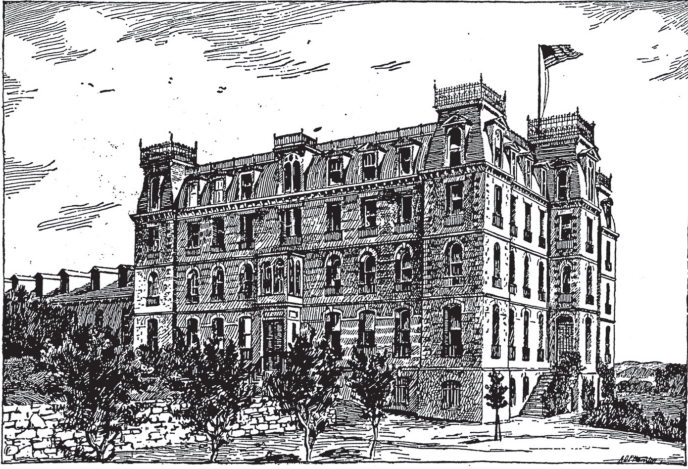
‘Cyrus Hamlin, D. D., LL.D.’ Rev. Chares C. Creegan, D. D., *Ibid.*, pp.113-126.

‘Robert College - The Beginning,’ Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, pp.270-301.

‘The Founding of Robert College.’ Cyrus Hamlin, *My Life and Times*, pp.415-484.

ている。地代は7,000ドルであった。1860年にボードを退会したハムリンは夫妻でアメリカを目指す。ロバートとの打ち合わせに従ってイタリア・ドイツ・フランス・イギリスと経由する旅の途上ではキリスト教系大学設立のための募金活動を行った。61年に到着したボストンではハーバート大学以外では協力が得られず、総額は13,000ドルにとどまった。ニューヨークに滞在した時には南北戦争への熱意で募金活動もできなかった。このような状況も鑑みロバートのアドバイスもあり、ハムリン夫妻は1861年6月にはトルコにおけるキリスト教系大学の設立に従事するためにアメリカを発った。イスタンブールに到着してすぐに当初の大学候補地の所有者からハムリンに土地売却の申し出があった。ところが、当局からは候補地におけるキリスト教系大学設立の許可がおりなかった。そこでハムリンはアメリカンボードと交渉を始め、ベベクにあったセミナーの使用に関して「校舎の維持と管理に責任を持つ」ことを条件として貸与の契約を結ぶ。こうしてかつてのベベク・セミナーでロバート大学が開設されたのは1863年である。開設当初の大学は予科と本科から構成され、当初の教員は次の通りであった。パーキンス (Rev. Perkins, George), シャフラー (Rev. Schauffler, Henry) 神学・ギリシャ語担当, カザコス (Mr. Kazakos) フランス語担当, ダレム (Dalem, M.) イタリア語とデザイン担当, マーチェシ (Mr. Marchesi, M.) アルメニア語担当, ギジジアン (Mr. Gigizian, Hagopos), 開学後に数名が加わる。大学は4名の学生で始め、数年のうちに30名を越えている。ベベク近くの校地に関して使用許可が出たので、1869年に移転した。新しい校地で最初に建てられた校舎はハムリン・ホール (Hamlin Hall) と命名された。

ロバート大学の開設において何より問題となるのはアメリカンボードとハムリンの関係である。ベベク・セミナーにおけるハムリンの教育方針はトルコミッションにおいてもボード本部からも支持されていなかった。唯一ハムリンを理解し支えたグッデルは1865年に宣教師を辞任し、67年に75歳で亡くなっている。つまり、ハムリンがロバートと出会って意気投合しロバート大学開設のためにアメリカンボードの宣教師を辞任した1860年には、ボードの宣教師とし



ロバート大学

て教育活動を継続する環境が一段と厳しくなっていた。事実、ボストンで募金活動に従事していたハムリンに対してアンダーソンは「ボードの教育活動は現地住民の子弟に限る」と主張して、非協力的だった¹⁰⁾。したがって、ハムリンがトルコにおける最初のキリスト教系大学の設立に情熱を燃やした要因の一つとしてベベク・セミナリーにおける見通しの厳しさがあげられる。ところが、ハムリンの著書にはアメリカンボードに対する否定的な叙述が認められない。なぜか。ボードとの友好的な関係を持続しないことにはベベク・セミナリーの校舎借用によるロバート大学の開設ができなかったことが理由として考えられる。

アメリカンボードとの関係を考慮して採用した教員が2名いた。1人はトルコミッションにおける同労者 (Schauffler, Williams) の子息シャフラー (Rev. Schauffler, Henry Albert) である。彼は1859年にウィリアムズ大学 (Williams College) を卒業し、さらに神学をアンドーヴァー神学校で法学をハーヴァー

10) Cyrus Hamlin, *Ibid.*, p.423.

ド大学で学んでいる。その後、ロバートの援助を受けて1年間ドイツのハイデルベルク大学で研修している。もう1人はパーキンス (Rev. Perkins, George A.) である。パーキンスはボードイン大学を終えた後、1853年にバンゴース神学校を卒業している。しかも、1854年から59年までは宣教師としてトルコで働いていた。彼ら2人はロバート大学開設時にハムリンに次ぐ立場に置かれていた。期待の大きさが推測できる。ところが、開設間もない大学でシャフラーと1学生の間にトラブルが発生した。この問題をめぐってハムリンとシャフラーの対応には際立った違いがあった。学生への厳しい処罰を求めたシャフラーに対して、ハムリンは穏やかな対応を求めた。パーキンスもシャフラーの立場を支持して、彼らは「ハムリンは人間的にも見ても現実的対応においても大学の学長にふさわしくない」と批判を始めた¹¹⁾。1864年11月にシャフラーとパーキンスは大学を辞任している。しかし、教員間の対立は理事会においても尾を引いた。ロバートが「全面的にハムリンを支持する決断を下した」のは65年3月である¹²⁾。

その後のハムリンを簡潔に見ておきたい。1873年に学長を辞任したハムリンはアメリカで2年間ロバート大学の基金を募る募金活動に従事する。1876年にはかつての同僚からトルコでの教育活動に復帰するようにと誘われ、バンゴース神学校 (Bangor Seminary) で3年間教えている。1880年にはアメリカ・バーモント州のミドルベリー大学 (Middlebury College) の学長となり、1885年まで務めている。

おわりに

ハムリンの思想と行動を1860年のボード宣教師の辞任と1863年のロバート大学設立を中心として考察したい。一般にハムリンは、ボード本部の宣教方針が

11) Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, p.278. ハムリンは自らの著作においてこの問題について一切言及していない。

12) Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, p.249.

伝道活動重視へと変化した19世紀半ばにあって、教育活動への独自の立場を貫いた人物として評価されている。ハムリンに対するこの見方には基本的な正しさとそれだけでは読み解けない課題もある。

まず、基本的な正しさである。ハムリンの教育者としての一貫性を評価する立場は1860年に宣教師を辞任し、1863年にロバート大学を設立した歴史的事実とその間のハムリンの生き方に基づいている。その上で、何が彼をそのような生き方に導いたのかが問われなければならない。実はそれまでもハムリンにこのような特色は見られていた。たとえば、トルコ・ミッションの会議で「このように世俗的な活動は生徒の学習的習慣と敬虔さをそらしてしまいます」と強く反対された時に、「欠乏した社会に生れた生まれた魂は物乞いするよりも労働から学ぶことによって心を腐敗させることはない」と反論して独自の教育活動を継続している。あるいはボード本部におけるアンダーソンの批判に危機を覚えたハンニバルから本部に弁明するようにと懇願された際にも「本部に対して返答する必要は何もない」と応えている。これらの行動には自らの教育にゆるがぬ自信をもって活動しているハムリンが見られる。何がこれほどの自信を与えたのだろうか。何よりも考えられるのは幼少期から取り組んだ農作業によって育まれていた「独立心と創意工夫に富む行動力」である。幼少期に育てられた人間性は青年期においても宣教師となってもハムリンの基本的な特性として育てられていた。

しかし、「独立心と創意工夫に富む行動力」だけでは分析できないハムリンの行動が2点ある。これらはどのように考えればよいのであろうか。まず、ロバート大学設立に至る時期におけるハムリンのアメリカンボードに対する態度である。すでに指摘していた通り、ハムリンの著書には彼の教育方針に反対する宣教師や彼を排除したアンダーソンに対する批判的な叙述はない。この点に関してはロバート大学がベク・セミナリーの校舎を借用して開学した事情が考えられる。要するに「独立心と創育工夫で富む行動」だけでは切り開けない事態に対して、細心の注意を払って事柄の解決に向かっている。しかし、アメリカンボードとの関係はそれだけではない。ボードの関係者として採用された

シャフラーとパーキンスをめぐる開学当初に発生した深刻な事態があった。この件についてマルシアとマルコルムが詳細に事件のいきさつを述べ考察を加えている¹³⁾のに対して、ハムリンは自らの著書において一切言及していない。自らの教育活動に自信があるのであれば、堂々と自分の立場を公にし、同様にシャフラーたちの立場にも言及すればよさそうである。なぜ、開学当初に発生した深刻な事態に対する言及を避けたのか。この件に対して彼が細心の注意を払ったのは間違いがない。その上で、一切の言及を避けた。それはロバート大学の将来に禍根を残さないためであったと考えられる。要するにアメリカンボードとの友好的な関係を前提しないことには成立しないロバート大学の現在と将来を考え、シャフラーたちとの対立についても言及を避けたと考えられる。

もう1点はロバート大学の学長就任以降の活動内容である。ハムリンは1873年に学長を辞任すると、アメリカで2年間ロバート大学のための募金活動に従事している。それからの3年間はトルコのバンゴー神学校で教え、1880年からは85年までアメリカのミドルベリー大学の学長を務めている。要するに比較的短い間に次々と教育現場を変えていくのである。これではどの現場においても十分な教育効果は期待できない。もし独自の方法に自信を持って教育活動に取り組むのであれば、同じ場所に長く務める必要がある。考えられるのは年齢からくる限界である。ハムリンがロバート大学学長を辞任した1873年には62歳であり、ミドルベリー大学学長に就任した1880年には69歳だった。高齢期に入っていたハムリンにはかつてのように自らの信念に基づいた創造的な教育活動には従事できなかったのであろう。このように考えると、ベベク・セミナーにおける教育活動と情熱を燃やして取り組んだロバート大学の開設にはハムリンの個性が最も生かされていた。

13) Marcia and Malcolm Stevens, *Ibid.*, pp.270-301.